

公務災害のさらなる減少に向けて

# リスクアセスメントを進めよう

リスクアセスメントは、平成18年度以降、その実施が労働安全衛生法上の努力義務とされ、昨年6月1日からは、化学物質のリスクアセスメントが事業者の義務とされた。

公務災害件数は、絶対数は減少しているものの、千人率で見ると高止まりといつて良い状況にある。この状況を打開するには、職場の潜在的な危険性や有害性を見つけ出し、それを除去・低減するリスクアセスメントの手法が有効ではなからうか。そこで、リスクアセスメントの考え方や実践事例などを取り上げてみたい。

## 総論 実践的リスクアセスメントの進め方

### 何のために・誰のために行うのか まずは、そこから考えよう

安全と人づくりサポート代表 古澤 登



労働（公務）災害は、従来の活動の継続だけでは、今以上に減少しない。本稿では、多くの企業を指導してきた筆者の実績から、あるべき論ではなく、腹落ちする実践論を紹介する。特に災害の未然防止活動の柱である「リスクアセスメント」活動のとらえ方・進め方について見つけ直す機会にしてほしい。

#### 現場目線の安全活動を進めよう

日本の労働災害は、昭和36年をピークに減少してきたが、ここ5年ほど、休業災害件数は横ばい（業種によっては上昇）、死亡災害は1000人を切ったが横ばい状態と考えて良い。

一方、地方公務員の公務災害も、

千人率では、ここ10年ほどは減少せず横ばいが続いている。またその値は、製造業の約3倍、建設業の約2倍である。公務職場は、職種も労働環境も多岐にわたり一律では語れないが、根本的な課題には民間の職場と共通することが多い。

その一つとして、「安全対策が一筋縄ではいかなかった時代」になったことが挙げられる。昨今、災害が減少しない原因は、危険感受性の低い人の増加、ベテラン層の退職、就業形態の変化（非正規雇用の増大、危険な作業を含めた請負化等）……と多様化している。これらが複合的に絡み合い災害が発生するため、以前に比べ安全対策は格段に難しくなっている。

また、ゼロ災運動（一般に、危険

予知〃ヒヤリハット〃指差呼称〃など〃も効果を上げてきたが、現実には「やらされ感」っぽい形骸化した活動」になっていることが多い。

では、どうすれば良いか。

現場で働く人が、安心して作業ができる環境整備と、活動を整理して、〃腹落ちする活動〃にして、〃深化〃させることが必要である。私が大事にしてきた考え方に「現場目線の活動」がある。「やらせた感」を持った管理者が多いことも問題であり、管理者層から腹落ちするように努力することも大切である。

以上のような視点で、リスクアセスメントのあり方について、以下、述べていく。

### 〃表（く）（り）（ご）（こ）〃を現場に〃させてはならない

ヒヤリハット活動は、危険感受性を高めるために必要な活動だが、現実には「件数重視のノルマ化」した活動になっていて成果を出せていないことが多い。また、提案がそのまま提案者に降りかかるような「天につば」の活動にしている現場から良い提案は出てこない。

大切なことは、現場からの提案を

管理者側がまず受け止めるしくみ、受け皿があること、そして、管理者が自ら改善テーマを持つことである。

また、リスクアセスメントという言葉はかなり浸透してきたが、現実には「切った・張った、滑った・転んだ」という内容が主体になっている。

こうした「網羅的な洗い出し」は、すべての災害をなくすためには必要なのだが、それを強調しすぎて、〃アレコレモレ〃と、洗い出すことが目的化していないだろうか。

本来洗い出すべき重篤な災害の洗い出しが抜けている、何もならない。現場に「リスクアセスメント〃表〃づくり〃ごっこ〃」をさせてはならない。

加えて、リスクアセスメントを現場に〃丸投げ〃するケースもよく見られる。本来、作業経験が豊富で知識を持った人（企画部署や管理者）が、危険源と人の接点を洗い出し、改善することが理想的であり、これが本来のリスクアセスメントである。こうした活動をしないで現場に、〃丸投げ〃すると漏れが生じ、重篤な災害につながる可能性が高くなる。

しかし、現実には改善するアイデア

アも費用も時間もないなどの中で安全対策を進めなければならない。現場で実施する活動を、〃現場リスクアセスメント〃と呼ぶことにして、できるだけ現実にあった進め方を考えてみよう。ただ、その前にリスクアセスメントの本質について、次項で改めて確認しておきたい。

### リスクアセスメントの本質について

#### ◆物的対策（環境整備）が第一義

「人は、ミスを犯し、機械は壊れる」という前提で考えることが大切で、ポカミスや、体調不良などで危険な場所に近づいてしまうようなことにならないように、特に物的対策（環境整備）をすることが第一義である。

#### ◆「危険源の共有化」も対策の一步

しかしながら、清掃事業などに代表されるように人に頼る作業が多く、物的な対策が難しい職場も多くある。

そのような場合、リスクの洗い出しを小集団で実施すると良い。同じ職場で働く人が危険源の共有化ができ、互いに注意し合える雰囲気になり（相互注意活動への発展）、元気な職場づくりにつながる。危険源の

共有化も対策の一步である。

#### ◆「やらされ感」からの脱却を

「リスクアセスメントは改善の入口」でもある。課題は、「やりにくい」「ムリをしている」作業ともいえ、現場の作業が「やりやすくなる」「無理をしなくてすむ」ための改善が進めば、全員の達成感が得られ、さらなる改善意欲が生まれ、やらされ感からの脱却へとつながる。結果として作業効率も向上するはずである。

#### ◆改善活動のPDCAサイクルを回すこと

たとえ改善が進んだとしても、対策の後には、新たなリスクが見つかることも多い。さらに改善を進めること、つまり改善活動のPDCAサイクルを回すことが重要だ。これが「改善を継続する人と組織の醸成、改善体質への変換」であり、リスクアセスメントの大きな効果といえる。

#### ◆最終的には作業標準書などへ落とし込むこと

PDCAサイクルを回すだけでなく、その結果を作業標準書や規格書（職場の財産・知恵袋として）へ反映させて、活動の成果を蓄積することも重要だ。

これらを作業者の教育・訓練に使っていくこと、特に改善に至った経緯や努力した点など背景を説明すると、結果説明だけよりも、腹落ちしたものになっていく。

ただし、標準書は技術の進歩や労働環境の変化などの要因で、常に見直されるものである。したがって「改善のベースとなるものが標準書」という考え方を持つことも大切である。

### 現場リスクアセスメント、そのポイントとは

#### ◆対象の優先順位をつけること

すべての設備・作業について実施することが目標だが、順番として、



危険源（エネルギー）が大きい設備・作業、設備故障が多い箇所を優先しつつ、計画的に一設備・一作業ごとに実施すると良い。

#### ◆「最悪の事態」を想定すること

対象の選定に当たっては、「定点観察と相互観察」の手法を取り入れ、重篤な災害に的を絞った洗い出しをすると良い。

「定点観察」とは、一か所・一作業を対象に30分以上観察する方法である。5～10人の観察者で「最悪の事態」を想定する。表現はきついが「どうしたら災害を起こすことができるか、死ぬるか」を見つけよう」ということである。まず、「ケガの程度」の高い状況の想定をして一人一件で良いので洗い出しをする。

重篤な災害だけをなくせば良いと言っているのではない。まずは誰もが対処しなければと考える重篤な災害にターゲットを絞っていけば真剣に取り組み、成果に結びつきやすいという考え方である。

#### ◆まず良い活動をほめること

巡視やパトロールが「指摘合戦」となっていることが多い。現場は99%一生懸命ルールを守り作業をしているが、どうしても守られない場

合などが1%あると考える。

まず良い活動を探し、参加者から一点ずつほめて（認める）もらおう。良い活動は、他部署でも共有化して展開できるので、まず真似をして活動し、それぞれが付加価値を付ける活動へ発展していく。こうしていけば全体の底上げにつながるはずである。「相互観察」の効果の一つでもある。

#### ◆「改善ポイント」の提案

さらに、どうすれば災害を防止できるかという発想で改善ポイントを織り込みつつ提案をする。そうすることで指摘だけでは進まなかった課題に対して「やってみよう」「提案ありがとう」という気持ち湧いてくるはずである。

「会議室へ帰ってから整理をする」という発言を聞くこともあるが、現地で議論することでアイデアが浮かぶこともあるし、ある程度、改善の方向が見えて、現場の人が腹落ちする形になると思う。これも「相互観察」の効果の一つであり、現場リスクアセスメントの神髄と言っても良い。

### 対策の進め方について

#### ◆「100点が0点か」からの脱却を

管理者は、危険源が洗い出され、リスクレベルⅣやⅢがあると「すぐに100点をとれ！（すぐにⅠにせよ！）」と指示することが多々ある。

しかし、現場には知恵もない、時間もない。そこで100点は無理と考えて、手を付けなければ0点のままである。少しでも（10点でも）改善が進んだらまず認め、そして次のステップに向かっていくアイデアを提供し、一緒になって考える姿勢が大事になる。

すると現場では、方向性が見えて更に改善活動を進めていくようになるはずである。そして60点程度がとれたら、残留リスクを明確にして、次のテーマに進んでも良いとしよう。次から次へと改善をしていく中で知恵も経験も積まれ、元のテーマに戻ってきたときには、70点、80点と、さらなる改善につながっていく。この過程が大変重要で、「人を育てチームワークを向上」させていくことにつながる。

◆全員が改善テーマを言える

- ・テーマの優先づけは、
  - ・現場として早くしたい（してほしい）対策
  - ・現場でできそうな対策
  - ・現場の作業が楽になる／やりやすくなる対策
- などの視点で決める。
- まず3項目を選定し、期限を設定して1項目ずつ確実に対策を進めていくことで良いこととする（対策の重点指向）。

実践論で言えば、改善テーマ・目標を全員が言えるようになっていく職場は、大きな事故は発生しにくい職場といえる。アレモコレモと一度に実施させようとすれば、かえって意識も希薄になり、現場にウソをつかせることにつながり逆効果になる。

何のための誰のための活動か

◆「表示」のあり方を考える事例

狭い階段を上っていくときに「足元注意」と表示がしてあったので足元に視線を落とし上っていくと、ヘルメットが梁に当たった。そこには、「頭上注意」と書いてあった。

この場合、本来は、階段に「頭上注意」と書くべきで、逆ではないかと思った。表示さえすれば良いというものではないという事例である。また、「関係者以外立入禁止」という表示はよく見かける。「関係者」とは誰のことだろう。

表示には、具体化・具体的表現が必要だと思う。さらには「立入禁止」は、「気をつけて入れ」と読むのではないかと思うことがある。大きな開口部があって、設備の不具合などが多ければ、現場の人たちは入らざるを得ないわけで、具体的に「○としてから入れ」と書くべきではないか。

表示は、管理者の免許符ではないし、表示さえすれば対策完了としてはいけない。真の原因に対する真の対策をトコトン追求していこう。

◆活動の流れをつくる

陸上の100m走のようにヨイドン！とすべての安全活動を同時に展開することは難しいし、現場にウソをつかせることにつながる。せめて400mリレーのように一つずつ進めていくようにしたら現場の理解が進むのではないか。定常作業は、作業標準書があるとい

う前提で、次のように考えたらどうだろう。

- ①非定常作業をターゲットにする
- ②重篤な災害に絞ってリスクアセスメントを実施
- ③対策は環境整備（ハード対策・設備改善）と人的対策（ソフト対策・改善活動と教育・訓練）のバランスを考えて実施
- ④巡視などでフォロー（OJT）
- ⑤ヒヤリハット活動で、さらに洗い出し

など、一つずつ活動を進めていくことで腹落ちした、自分自身のための活動になっていくのではないか。

終わりに

◆「安全管理」から「危険管理」へ

日本ほど安全という言葉を多く使う国はないとも言われる。「安全」の定義は難しいが、「危険」はわかりやすい。危険がわかれば、人間の本能として避ける行動も具体的に取るようになるはずである。リスクアセスメントは、危険を幅広く認知するための「危険管理」手法とも言える。

◆「人づくり」につながる活動を

リスクアセスメントの考え方・進め方について紹介したが、「現場は生き物」であり、日々変化している。環境整備や改善をしたとしても最後は人に頼ることになる。今回紹介した現場リスクアセスメントを実践することで「人づくり」「職場づくり」につながることを期待する。そのための手法なのである。

◆実践方法の構築を

公務職場の職種は、いろいろであり、一律の対策は難しく、一件一様の対策になることが多いと思う。ぜひ、現場リスクアセスメントの進め方を皆さんで話し合っ、具体的な成果に結びつくような進め方を工夫してほしいと思う。

PROFILE

安全と人づくりサポート 代表  
古澤 登 (ふるさわ のぼる)

トヨタ自動車(株)安全衛生推進部所属後、一貫して安全衛生活動の全社統括を担当し、各種活動を確立。トヨタグループ等関係会社、および多くの企業へ実践的安全活動を展開し、企業体質強化に寄与。同部担当部長を経て、平成16年三菱重工(株)に転籍、代表取締役専務、技監を経て、平成23年3月退社。同時に「安全と人づくりサポート」を立ち上げ、代表に就任。中央労働災害防止協会や日本機械連合会、各種防災団体等の委員・役員を歴任。中災防緑十字賞、愛知労働局長功労賞、第一回向殿安全賞などを受賞。